
精霊神機アーヴァイン - A bond of eternity -

北洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊神機アーヴァイン - A bond of eternity

【Nコード】

N1328Q

【作者名】

北洋

【あらすじ】

ここは精霊の死滅した世界……精霊が変化した魔法の石「精霊石」による恩恵で、人類は繁栄を極めていた……。これはとある国で生きる一人の青年の物語。ファンタジー初挑戦、ありがちなファンタジー世界にロボット要素を取り入れた話を書いていく予定です。

プロローグ（前書き）

初めまして、北洋と申します。

にじファンでも活動しておりますが、今回オリジナルのファンタジー小説に初挑戦です。

これを読んでくれた読者さんが楽しんでいただければ幸いです。

感想・評価（酷評でもOK）・誤字報告などをいただけると嬉しいです。

ブローグ

ここは精霊が栄華を極めていた「世界」

空中では2つの光が交錯していた。

一方は白き甲冑に身を包んだ騎士。

剣を携え、空中を舞い、振るう剣で相手を追い詰めていく。

もう一方は紅蓮の炎に身を包んだ巨人。

炎の巨人はその身から爆炎を生み出し、騎士の剣技に対抗している。

「何故だ、アーヴァイン？」

炎の巨人が騎士に問うた。声をかける間も攻撃の手は休めず、互いに空中を飛び交っている。

騎士は答えない。

ただ意を決したかのように炎の巨人に向かって突撃し、炎の巨人は巨大な炎の柱を生み出して、騎士を炎に飲み込ませるべくその手から放っていく。

しかし騎士は携えた巨大な盾で炎を防ぐと巨人に肉薄、胸と思しき部分に剣を突き刺していた。

巨人の背から剣が迫り出し、苦悶の声が上がる。

「な、何故だ……それだけの力がありながら、何故精霊を裏切る……

…何故、人間に味方する？」

「……………」

「答える、精霊神アーヴァイン！」

それでも騎士は答えない。

無言のまま巨人に刺さったままの剣を力任せに振るった。

炎の巨人は肉体を両断され、無残にも火の粉を撒き散らせながら消えていく。

「おのれ、よくもこの炎の精霊神イフリートを！ やはり気でも触れたようだな、アーヴァイン！」

既に下半身が消滅した炎の巨人　イフリートが絶叫した。

「精霊を滅ぼそうというのか？　愚かな！　長き時を孤独に苦しみながら、この世界と共に消滅するがいいわ！」

この直後、イフリートの体に光が収束し、内在していた力が爆発した。

凄まじい熱と風が空気を焦がす。地上の草木を根こそぎ燃やし尽くし、イフリートの存在した周囲は焼け野原と化した。

焦土に残されたのは、炎を盾で防御していた騎士と、赤く透き通った巨大な宝石だけ。

「イフリート……」

騎士は初めて口を利き、地上に落ちた赤い宝石を拾う。

しばらく眺めた後、騎士は宝石を砕いていた。

鮮血が飛び散ったかのように宝石は粉々になって消えていく。

「それでも、私は……」

騎士はしばらく空を見上げていたが、次の瞬間には姿が掻き消えていた……残されたのは燃やし尽くされた大地だけ。

そして、この日、精霊は地上から姿を消した。

この日、人類は精霊との戦争に勝利したのだ。

英雄の名前は「聖騎士アーヴァイン」。

人類はアーヴァインを崇め、奉り……長いときを経て、その名前は物語られるだけの存在となる　……

……　　ここは、精霊が死滅した「世界」。

精霊とは世界の魔力を司っていた存在。
世界の秩序を司っていた存在。

しかし、過去の大戦により精霊たちは人類によって滅ぼされた。
この世界に精霊は塵の一欠けらも存在していない。
人類に滅ぼされた精霊が残っていたのは「世界」という一つの
箱庭と、精霊が体に溜め込んでいた魔力の結晶体　精霊石だけだ
った。

人類は精霊が変化した精霊石の魔力を活用し、急激な発展を遂げ
る。

精霊石を使った魔力制御装置　　魔道具^{ギア}。

魔道具^{ギア}を基礎にした文明が発展し、やがて技術は敵を殺すことに
特化されていく。

戦闘魔道具^{バトル・ギア}、そして精霊機^{エレメンタル・ギア}と呼ばれる存在の台頭を持って「世界」
は戦乱の時代に突入し、やがて精霊石を産出量の多い土地に4つの
巨大な国家が建設された。

長い時の間、4つの大国は争いあい、疲弊し、互いに休戦を申し
出る。

束の間の平穏が「世界」に訪れたのだ。

しかしそれは偽りに過ぎないことを「世界」に生きる者全てが理
解していた。

大国が力を蓄えた時、再び大戦は勃発するだろう……。

分かりきった事実であったが「世界」に生きる人には今を精一杯生きるしか術はなかった。

それは4大国の一つ「風の国」に生きる、その男にとっても同じだった。

これは「風の国」に生きる、一人の男の生き様を描いた物語である
……

プロローグ（後書き）

縦読みでも横読みでも読めるように執筆していくつもりです。

ただパソコンで読む事を前提に執筆しているため、形態画面では読みづらいかもしれません。

拙い文章ですが、ゆっくり更新していきたいと思いますので、長い目でよろしく願います

出会い（前書き）

ファンタジーモノ初挑戦です！

感想や指摘、誤字脱字報告など貰えるととても嬉しいです。

出会い

少女は語る。

「昔々、聖騎士アーヴァインという英雄がいたのです」

少女のいる場所は人里を離れた小さな納屋だった。

家畜用の干草を収納するための納屋のようで、無意味に広い屋内が少女の周りの人気のなさを際立たせている。

しかし少女の周りに人間がいないという訳ではなかった。

少女の周りを取り囲むようにして屈強そうな大男たちが数人佇んでいる。同様に腰に剣を携えており、さらには人を殺めることに慣れているような凶悪な顔つきさえしていた。

しかし艶美な金髪を短く切りそろえた少女は、祈るようにして両手を構え男たちに語っていた。

「聖騎士アーヴァインは邪悪な精霊たちを打ち滅ぼし、この『世界』に久遠の平和と安寧をもたらしたのです。アーヴァインは『世界』を救ったのです。今の『世界』があるのは全てアーヴァインのおかげと言ってもいいのです」

少女が語ったのは、かつて英雄と呼ばれた人物の伝説だった。

アーヴァインと言う人物が、どれだけ素晴らしい人物だったのか。アーヴァインと言う人物が、どれだけ慕われていた人物だったのか。

少女は延々と自身を取り囲む男たちに聞かせていく。

自分がどれだけアーヴァインを崇拜しているのか。崇拜することですべて幸せな気分になり、争いとは愚かな事だと実感できるのかを、目の前で武器をチラつかせる男たちに説いていった。

「ですから、争いはアーヴァインも望んではないのですよ？」
「だったらどうした」

頭に鉢巻を巻いた男が答えた。腹立たしげに腰の剣を抜き放つ。

「お前、自分の置かれてる状況分かってんのか？」

「ほえ？」

「ほえ、じゃねえ！」

鉢巻男が少女に剣を振り下ろす。

剣の切っ先は少女の眉間寸前で止められた。

「危ないじゃないですか」

「お前……絶対、状況を理解できてないだろう？」

呆れたように鉢巻男は剣を少女から引いたが、

「そんなことはないのです」

少女は自信満々に言い放っていた。

「あなたたちは、私による、聖騎士アーヴァインの話を聞きに来たに決まってるのです」

「なんでだよ！ お前、自分が誘拐されたって分かってるっ？」

「ほえ？」

「ほえ、じゃねえっ！」

鉢巻男は地団駄を踏む。

「お前は、俺たちにつ、誘拐されたんだよ。分かるかッ？」

「ユーカイ？ なんですか？ それは美味しいのですか？」

「うがあああ、コレだからお嬢様はよお！」

「お、落ち着いてください兄貴」

少女の答えに再び抜刀した鉢巻男を弟分らしき男がなだめていた。

鉢巻男は肩を揺らし息を荒くしているが、少女は首をかしげて男を見上げている。男と違い無垢で純粋な少女が疑問に満ちた表情で男を見ていた。対照的なその態度はさらに鉢巻男の頭に血を上らせただけのようだった。

顔を上気させた鉢巻男は剣を再び少女に突きつける。

少女には男が何故怒っているのか分からなかった。

「お前は誘拐されたのだ。国の重鎮の娘であるお前を人質にすれば、多額の身代金に貴族の奴らは応じるしかないだろうからな」

「いよ、流石兄貴ッ。悪の鏡!」

鉢巻男の弟分が褒めちぎる。

「そんなに言われると照れちゃうのです」

しかし先に反応したのは少女の方だった。

「なんでお前が照れてるんだよ!」

「だって、私のおかげでお金がもらえるのでしょうか? 褒められてるのは私に違いありませんね」

「ちげーよ!」

鉢巻男が吼えていたが、少女には男が何故怒っているのか理解できなかった。

「すいません……気分を損ねてしまったようです……」

「ああ、そうだな」

忌々しげに答える鉢巻男。

「私、少し天然な所があるらしくって……」

「大分な」

「お父様にも『エリスは天然だなあ』と呆れられることもしばしばで」

「親父さんも大変なんだな」

「所でアクノカガミとは美味しいのですか? 売っている店を知っていたら教えて欲しいのですが……」

「そんなモノねえよ! あと、勝手に帰ろうとするな!」

少女は立ち上がり、納屋の入り口の方を向いていた。

改めて少女を見ると、縄などで拘束されたりはしていない。

鉢巻男と弟分の他に男が数人いるのだからどうとでもなる、ということだろうか。

少女は翡翠の如く透き通った瞳で鉢巻男を見つめていた。

「え……駄目なのですか?」

「駄目に決まってるんだろ! ええい、お前の相手は疲れるな。弟

分、こいつの口を塞げ」

弟分は鉢巻男に命令されるままに手を当てて塞いだ。
よく見ると、弟分の手は茶色にくすんでいて汚らしい。

手を当てられた少女は目を白黒させて暴れだした。弟分の脛に蹴
つて「あいた」と悲鳴を上げさせていたが、腕力の差は歴然ですぐ
に取り押さえられてしまう。

「柱にでもくり付けとけ。たくつ、誰だよ？ 逃げられるわけな
いからくる必要もないだろう、なんて言ったの」

「兄貴ですよ」

「そうだったか？」

「貴族の女にも優しいなんて流石です！ 兄貴は悪の鏡です！」

「ふふん、そう褒めるな。照れるじゃねえか」

鉢巻男と少女を拘束し終わった弟分が声を揃えて笑っている。

少女は不自由な思いをしていた。

柱に張り付けにされてしまい動けない。動けないことがこんなに
不快だとは思っていなかった。口にも布を噛まされてしまい唸り声
しか上げることができない。

少女は思う。

おかしいな。どうしてこんな事になったのだろうか。

城下町には「精霊焼き」という美味なる焼き菓子があると聞き、
城から抜け出してきたのがマズかったのだろうか。

父から貰って貯めていたお金で「精霊焼き」を買って、父と一緒に
に優雅なティータイムを楽しもうと考えていたのに……少女の心の
色は黄色から徐々に暗い色に沈んでいく。

「さて、問題はどうかやって身代金を要求するかだ」

「ここまで上手く運べたから、足はつけたくないですね」

「だな。ここは慎重にいこう。普段貴族に虐げられてる分、要求額
は天文学的な数値にしてやるぜ」

「悪いです。流石兄貴、悪いです」

鉢巻男たちは集まって話し合いをしていた。

少女は誘拐というものを知らなかった。しかし良からぬ事をされるのだろつという事は理解できた。

ここに来て、初めて少女の心は逃げなければという思考に至る。自由になる目で男たちを観察した。男たちの得物は腰に吊るした一振りの剣だけに見える。

だが一筋縄ではいかない。世間知らずな少女ではあったが男たちの武器の事は知っていた。

バトルギア 戦闘魔道具

そう呼ばれる剣の柄には緑色の宝石が埋め込まれていた。

「風」の精霊石だ。

4大属性の1つ「風」の魔力を内包した、「風の国」で最も出土量の多い精霊石である。

魔道具ギアの種類によって風を起したり、電撃を放出させたり、空気圧で体を少し持ち上げることもできる。電撃や風を発生した力は生活に活かされており、「風」の精霊石は「風の国」の生活文化に定着した生活必需品だと言えるだろう。

精霊石があり、魔道具ギアがあるからこそ、現在の「風の国」は成り立っているとさえ言える。

しかし戦闘魔道具バトルギアは危険だ。

精霊石から抽出した魔力を殺傷能力に特化させ、突風や真空波を巻き起こし、相手を消し炭にできる程の雷撃を生み出すこともできる。

男たちの持つ剣は、使い手次第では分厚い鋼鉄の板さえ切り裂ける能力を秘めている。

そういう代物だった。

「身代金を手に入れたらどうしましょうね？」

「俺、国を出て結婚するんだ」

「本当ですか！ 兄貴、俺たちも是非式には呼んでくださいね」
鉢巻男たちはのん気に会話を交わしている。

誰も腰の剣に手を伸ばしていなかった。少女の事など眼中に無い……そういうことだろう。納屋の中には視界を妨げる大きな障害物もなく、もし少女が逃げ出したならすぐに感づかれる。

少女に逃走経路は残されていなかった。

しかし少女は思う。

なければ作ればいいのだ。

只の少女には不可能だろうが自分ならできる。

少女が自身に内包された力を解放すれば、このような状況の打破は容易だ。

「これ、彼女の写真」

「おおー、美人じゃないですか！」

鉢巻男の見せた写真に群がり誰も少女を見ていなかった。

やるなら今しかない……帰って、父と「精霊焼き」を食べるのだ。食べるったら食べるのだ。悲壮な決意を胸に少女はまぶたを閉じた。柱に縛り付けられた少女の手に怪しい光が揺らめく。赤い色の光の粒子だ。やがて粒子は少女の手に集まり小さな炎となった。

少女は炎で柱に結ばれた縄を焼き切りにかかる。

鉢巻男たちは話に華を咲かせていた。

「どうだ、可愛いだろう？ ちなみに、俺の彼女の得意料理はパイ
ンサラダ」

その声が、いきなり凍りついた。

納屋の入り口の扉が木っ端微塵に弾け飛んだのだ。強烈な風と共に砕け散った木片が鉢巻男たちに降り注ぐ。

「な、なんだ？」

困惑した表情を浮かべる鉢巻男たち。

突然の出来事に驚いたのは少女も同じで、慌てて手の中の炎を消し、納屋の入り口に目を向けた。

長身の男が立っていた。

艶やかで吸い込まれそうに長い黒髪は後頭部で纏められ、肩口まで動物の尾のように垂れていた。丹精な顔立ちに、意志の強そうな黒い瞳。美男子と形容するに相応しい男が剣一本携えて、納屋の入り口に立ちふさがっている。

一瞬、少女は美男子に目を奪われるも、

「なんだ、お前は！」

鉢巻男の叫びで我に返っていた。

「何者だ、名を名乗れ！」

「陳腐な台詞だな」

「なんだとう！」

鉢巻男たちは激昂し、腰の剣を抜き放った。

人を殺すことに特化した魔道具ギア 戦闘魔道具バトルギアだ。

鉢巻男たちは悪党だ。少女を誘拐したり、日の当たる所を歩けないような後ろめたいことを続けて来たに違いない。

隠れ家を見られた鉢巻男の行動に躊躇はなかった。

「風よ！ 巻き上がり、俺の敵を八つ裂きにしろ！」

刹那、鉢巻男の剣が振るわれる。

柄にはめ込まれた精霊石が煌き、男の剣筋に沿って巨大な真空波が切っ先から迸った。

目に見える程に圧縮された風の刃が美男子に迫る。

「むーむー！」

逃げて。少女は不自由な口で叫んでいたが時は既に遅し。

残忍な狂風が美男子を切り刻む

「ふう、面倒だな」

はずだった。

風が止んだ時、美男子は片手を突き出した姿勢で立っていた。

無傷だ。擦り傷一つない完璧に傷の無い状態で、美男子は剣を肩に乗せたまま気だるそうな表情をしている。

「な、何だお前は！」

鉢巻男の顔は引きつっていた。

未知に対する恐怖からだろうか？ 剣の切っ先は、人体を両断するには十分な剣風を受けて生きている美男子に向けられたままだった。

「何をした？ お前は何者だ！」

「説明するのも面倒だが、見目麗しい女性の前だ。名乗ってやるから感謝しな」

美男子が剣を鉢巻男たち向ける。精霊石は確認できない。何の変哲も無い鋼鉄の剣だった。

しかし男たちは肩を震わせて、一步後ずさっていた。

少女は思う。見目麗しいってどういう意味だろう、と。

「俺の名はフリー。フリーマン」

美男子の名乗りと共に、鉢巻男たちの表情が凍りつく。

「義賊『フリーランス』のしがない鉄砲玉さ」

美男子　フリーと鉢巻男たちの戦いが始まった。

少女　エリスは後に語る。

「昔々、聖騎士アーヴァインという英雄がおりました。アーヴァインの鎧は全ての魔法を防ぎ、剣は全ての魔力を薙ぎ払うことが出来たといいます。

彼の能力はまさにそれ……いえ、そのような気がしました。何故でしょう？　理由は分かりません。ただ、これだけは言えるのです

「

彼こそがこの物語の鍵であり、主役なのだ、と　……

出会い（後書き）

次回からは主人公視点の3人称で書くつもりです。

出会い 2（前書き）

今回は主人公視点です。

出会い 2

城下町から離れた場所にある、何の変哲も無く人気の無い納屋。

「風の国」は絶対君主制度で運営される国家である。

王族・貴族の暮らす城砦と貴族街、そして城下に広がる街に平民は暮らしていた。

「風の国」の国土は大まかに言ってしまうえばこの3つの区画で構成されているのだが、街から離れた場所には田園地帯や酪農地帯なども当然存在する。さらに行き場の無い平民の集う貧民街なども存在しているが、それらは貴族たちから完全に黙認（存在しないもの）とされているのが現状だ。

フリーは田園地帯の納屋の中に居た。

彼の眼前には剣を抜いた男たちがおり、おびえた様な表情で切っ先を彼に向けている。

男たちの近くには、金髪緑眼の美少女が柱にくくり付けられ、さるぐつわを口に噛まされていた。

フリーの目当ての少女が、だ。

「お、お前がフリーマンか？」

少女を誘拐した子悪党ども。その大将格らしき鉢巻男が叫んでいた。

「漆黒の騎士、フリー……お前がそうか？」

「ふっ……そうだ。俺はフリーマン。人呼んで漆黒の騎士とは俺のことだ」

フリーは自慢のポニーテールを揺らして答えた。

漆黒の騎士。フリーは光さえ吸い込みそうな黒髪と黒い瞳をしている。彼のような風貌は実は「風の国」では珍しく、しかも好んで黒い服を着込んでいるため付けられた異名だった。

本当に騎士という訳ではない。彼の剣技は騎士にも匹敵するという意味で付けられたのだとフリーは思っていた。

納屋の扉を打ち抜いた鉄剣を子悪党たちにかざす。

「観念してその子をこっちに渡せ。面倒だから抵抗するなよ？　どのみち、お前たちはもう指名手配されてみたいだからな」

「な、なんだと？」

鉢巻男が唸る。

「俺たちの足がつくはずがない。アイツが城から離れた時を狙ったんだ。そうそう、発覚するはずが……」

額に汗を滲ませる鉢巻男に弟分が話しかけた。

「あ、兄貴……」

「なんだ？」

「そう言えば、さうう時に城下町を巡回する兵士がいたような……」

「なんだと？　なんでそれを早く言わねえ！」

「す、すいやせん！」

鉢巻男は弟分の胸倉を掴んで怒鳴りつけるがすぐに手を離れた。

「言い争っていても仕方ねえ。逃げるぞ」

「おいおい、逃げられると思ってんのか？」

フリーは剣を構えて不適な笑みを浮かべていた。

子悪党たちは鉢巻男と弟分を合わせて4人だ。

腕っ節にも剣の腕に覚えのあるフリーが取り逃がすはずもない人数だった。

彼も伊達や酔狂で漆黒の騎士ダークナイトと呼ばれているのではないのだ。

しかし鉢巻男は唾を吐き出し、顔を歪めて声を捻り出していた。

「うるせえ、無能！」

「なっ？」

何故それを知っている！

それがフリーの率直な感想だった。

彼が「フリーランス」の仲間になんて呼ばれていることは事実。

だが誰も知らないはずなのに……鉢巻男は何故それを知っている

のだろうか。

「知らないのはお前だけだぜ」

「なんだと？」

「有名な話だぞ。漆黒の騎士ダークナイトは実に無能だつてな！」

「ぶすすつ」

鉢巻男の言葉に張り付けにされた美少女が笑っていた。弟分たちも声を上げて笑う。

なんとということだ。美少女に笑われてしまった……いや、それよりも。

フリーは頭を抱え込んでしまった。

せっかく漆黒の騎士ダークナイトというカッコいい異名が広まっていたいい気分だったのに……どこから情報が漏れたのだろうか？

しかも鉢巻男の弁では既に相当噂として広まっているようだ。

漆黒の騎士ダークナイト〓無能という図式は定着してしまっていると言うのか？

だとすれば由々しき問題だ！

「隙あり！ 腸はらわたプチ撒けて死ねえ！」

気がつくと鉢巻男が戦闘魔道具を振り上げていた。

薄緑色の真空波が剣から迸った。フリーは頭をもたげていたので反応が遅れる。

無害なはずの「風」の魔力が、命を刈り取る死神の鎌と化してフリーに襲い掛かった。

つい、持っていた鋼鉄の剣で真空波を受け止めてしまう。

「あつ」

両刃の安っぽいそれは、刃の中ほどで気持ちよく両断された。

真空波がフリーを直撃し、巻き上がった突風で彼は弾き飛ばされる。

納屋の中に納められていた飼葉の中に頭から突っ込み、葉と埃が舞い上がった。

「殺ったぜ！」

鉢巻男が剣をかち上げていた。まるで勝利者のように。

「なあああにが漆黒の騎士だ。^{ダークナイト}敵のまん前で悩んでじゃねえよ、ばーかばーか」

「汚い。流石兄貴、汚いです！」

「ふふっ、そんなに褒めるな。照れるじゃねえか」

剣を納める鉢巻男に弟分と仲間たちが賛辞を送る。

勝ち誇っている。彼らの様子を表す表現はそれが適切だろう。

鉢巻男は捕らえている少女の方に歩を進めた。

「隠れ家が割れた以上ここに居るわけにはいかねえ。おい、弟分」

「へい」

「お前はアレを移動させる準備をしてくるんだ」

「合点承知でさあ！」

弟分は納屋の奥に駆け込んでいく。

「お譲ちゃん。お前は大事な人質だ。結婚資金のために一緒に来てもらうぜ」

「むーむー」

手を伸ばす鉢巻男に美少女は声にならない叫び声を上げていた。

猿ぐつわをかみ締めて表情が険しくなっている。

フリーを切り捨てた鉢巻男に嫌悪感を感じているのかもしれない。いくら理解が遅いとはいえ、自身が誘拐されたという異常な状況を認識するには十分な出来事だったのだろう。

鉢巻男の死角　柱の裏、美少女の手の上で再び小さな炎が上がった。

自分を縛る縄を美少女は静かに焼き切りにかかる。ちりちり煙を上げて縄が細くなっていくが、煙は小さく美少女の体に遮られているため鉢巻男たちには見えないようだ。

彼女が柱から開放されるのにそれほど時間はかからないだろう。

美少女は空いているもう一方の手に小さな雷撃を奔らせていた。

「ん？ お前、何をしている？」

美少女の行動に鉢巻男が気づいたようだ。

「そうよ。フリー、アンタいつまで寝ているつもり？」

「！」

しかし納屋の入り口から聞こえた声に鉢巻男たちが振り返った。扉の破壊された入り口には、背中に大きな弓と矢筒を背負った赤髪の女性が立っており、フリーが倒れている飼葉に向かって話しかけていた。軽装だが右手には小型のボウガンを身に付けており、偶然納屋に迷い込んだのではなく鉢巻男たちを追って来たという事が見て取れる。

「ふん。どうやら、あの無能の仲間みたいだな」

鉢巻男が鼻を鳴らしていた。

赤髪の女性は鉢巻男を一瞥する。

「あら？ フリーを無能と呼んでいいのはアタシたちだけよ、子悪党さん？」

「残念だったな。そのフリーマンはもう死んでしまったぞ。俺の魔法で切り刻まれて、その飼葉の中に」

その時、飼葉が動いた。

「おー、いてて」

「なあああにいいっ！」

フリーが飼葉の中から姿を現し、鉢巻男たちは絶叫を上げて固まった。

服と髪に纏わりつく飼葉を払いのけながら足を運び出す。

飼葉が鼻をくすぐりせきこんではいたが、体に血痕や傷跡は見受けられない。

無傷だ……ただ、上着はズタズタに切り裂かれ、手持ちの剣は中ほどから切っ先にかけて無くなってしまっていたが。

「くそ、俺のお気に入りを滅茶苦茶にしゃがって。剣まで真っ二つだ……面倒だ。また、買いなおさないといけないじゃないか」

「アンタが油断しているから悪いのよ、フリー」

「アーチャー」

アーチャーと呼ばれた赤髪の女性は呆れたようにため息をついていた。バツが悪そうにフリーの割れた腹筋から目を背ける。

「目の毒なのよ。……言つとくけど、アタシはアンタの代えの服なんて持ってないからね」

「おつとすまない。純情な子猫ちゃんには少し刺激が強すぎたかな？　ハハ」

フリーがアーチャーの方を振り返る。

アーチャーが眉を上げてフリーを蹴った。小さな悲鳴を上げて、フリーはまた彼女に背を見せる。

「アンタねえ、心にも無い事言うの止めなさいよね。それにアタシはガタイの良い男が好みなの。アンタみたいな体の細い男は眼中になしよ」

「そいつは残念」

失笑するフリーに、アーチャーは頬を薄紅色にして顔を背けて咳いていた。

「……つたく、このやり取り何回目だと思ってるのよ……？」

「なんだってー？」

「う、うっさいわね。こっち向くなって！」

「つれないなあ、アーちゃんは」

「その名前と呼ぶな！　この無能！」

「……………」

「一々しよげるな！　面倒くさい！」

「ああ、面倒だ」

「こっちの台詞よ！　大体、アンタは」

「お前らあ！　俺たちを無視してんじゃねえぞ！」

鉢巻男たちが激昂していた。

「なんんだおままはッ？　化け物きゃ！」

「あ、兄貴兄貴、噛んです！　動揺しているのが見え見えです！」

「ダアアアッ！」

鉢巻男に弟分その2が殴り飛ばされていた。

息を落ち着けようと深呼吸して鉢巻男はフリーを睨んできた。

「戦闘魔道具だぞ。普通はくたばらないいまでも怪我の一つぐら

いするだろう！　なのに、何故お前は無傷なんだ！」

「説明するのが面倒だ」

「野郎！」

鉢巻男は殺気立って剣を振るってきた。

3度目の真空波がフリーを襲う。

体を切り裂く瞬間、フリーは片手で真空波を軽く薙いだ。

それだけで真空波は霧のように霧散する。

「なっ？」

「万事休すって奴さ」

フリーが手を下ろした時には、

「風よ、我が敵を穿て！」

アーチャーが背負っていた大きな弓を構えていた。

彼女の握る矢じりには緑色の宝石が埋め込まれている。それは「風」の精霊石だった。彼女の意味に呼応して精霊石から「風」の魔力が弓矢全体を包んでいた。

弓形の戦闘魔道具バトルギアから放たれたその矢は、突風による螺旋の渦を巻き起し、一瞬で鉢巻男たちを飲み込んでいく。

「うげええええっ！」

鉢巻男と弟分2人は暴風に飛ばされて納屋の壁に叩きつけられる。弟分たちは気絶し、傷だらけになりながら辛うじて意識を繋ぎ止めていたのは鉢巻男だけだった。

アーチャーは大弓を背中に背負いなおした。

「ま、ざっとこんなものよね」

「アーチャー、お前は相変わらず容赦がないな」

「害虫駆除に加減する人間がおりますか？　いないわよ。あ、矢拾わなくちゃ」

「ち、ちくしょう……こ、こんなはずじゃあ……！」

ボロ雑巾のようにみすばらしくなった鉢巻男が唸る。服はボロボロ、全身傷だらけで流血もしているが、何故か頭の鉢巻だけは無傷だった。

アーチャーが鉢巻男たちの間を横切って、納屋の端に落ちている矢を取りに行こうとする。

すると鉢巻男は地面に這いつくばっている訳で、特に短くもない腰布を下から覗きなくなるのは男の性というもの。

鉢巻男は死にそうになりながらも必死に神秘の花園を見上げようとした。

途端にアーチャーのつま先が目直撃する。

「目がー目がー！」と悶絶して転げ回り、「傷がー傷がー！」と叫んだ後、目を押さえたまま痙攣して動かなくなった。

「ちっ、惜しい」

「アンタ、射つわよ？」

矢を拾ったアーチャーが小型ボウガンをフリーに向けてくる。

フリーは即座に両手を挙げて、降参した。

「まあ待て、軽い冗談だ。俺は面倒事は嫌いだ。仲間割れなんて面倒なのは勘弁だぜ」

「だったら口を塞げ。前を隠せ。息をするな」

「死ねつてのか？」

真顔のアーチャーの言葉にフリーは少し寒気を覚えた。

「じゃあ、さつさとあの子を連れて帰りましょう」

「分かった。それで万事解決だ」

フリーは柱に縛られた美少女の元に移動した。

まず口を塞ぐ布を外してやった。

「ぷはっ。あの……あ、ありがとうございます」

「どう致しまして、お嬢さん」

美少女の礼にフリーは微笑を返した。

「俺の名前はフリーマン。お嬢さん、名前を聞かせてもらってもいいかな？」

「私の名前、ですか？ 私の名前はエリスというのです」

「うむ、間違いないな」

「そうね。目的の人物はこの子で間違いなさそうね」

「ほえ？」

美少女 エリスは、首を傾げて間の抜けた声を出していた。

「いいかい、エリス。状況が分からないだろうから教えてあげよう」
フリーが極めて紳士的に口を開いた。

「君が誘拐されるのを見ていた兵士がいてね、君のお父上が君の奪還命令を騎士団に出したみたいなんだ」

「まあ、騎士団にですか？ それは大事なのですね」

「そうなのさ。……というか緊張感の無い返事だな。エリス、君は自分の置かれている状況が分かっているのか？」

「ええ、私はユーカイされたのです。大変なのです。ですので、先ほどこら逃げ出そうとしていたところだったのです」

「……この子、本当に分かっているのかしら？」

アーチャーがエリスの顔を見ながら呟いていた。

フリーもアーチャーの言葉に激しく同意を覚える。

エリスの言っているユーカイと誘拐は、同じ言葉のようで何処か違うような気がしていた。さらには自力で脱出すると言う始末だし、自身を客観的に評価できていない気がしてならない。

何処かズレているな。この少女は。

それがフリーの第一印象だった。

「いいか、エリス。君が誘拐されたから騎士団は必死に君を搜索している。ここまでは分かるね？」

「はい！」

エリスは満面の笑みで頷いた。

本当に分かっているのだろうか。

「そこで、その話を小耳に挟んだ義賊『フリーランス』が君を救出に参上したという訳だ。君をお城に届ければ、もれなく金一封がもらえるって寸法さ」

「キン IPPU？ なんですかそれは？ 美味しいのですか？」

「……さ、帰ろうか」

埒が明かない予感がしたフリーは早々に話を打ち切った。

エリスは説明を理解していないまたは誤解している可能性が高いが、あえて詳しく説明してやる理由もない。フリーたちの目的は、エリスを城に帰して報奨金を貰う事だからだ。

なんなら目隠しして拘束したままで城にご返却してやってもいい……それは言いすぎだが、エリスがフリーたちに助けてもらったと証言さえしてくれば、彼らにとつては何ら問題はない。

誘拐犯と誤解されなければいいのだ。

フリーが何故か焦げ目の突いている縄を解くと、エリスは自由になった。

短く切りそろえられた金髪が揺れ、見れば見れる程可愛らしい少女だった。

エリスはフリーに天使のような笑顔を向ける。

「ありがとうございます。助けてもらったついでと言つては何なのですが、一つ教えてもらいたい事があるのです」

「ん、なんだい。言ってみな」

「城下町に『精霊焼き』という美味なる焼き菓子があると聞いたのです。私はそれを探しに城からでたのですが、何処で買えるか教えてもらえませんか？」

笑顔は素晴らしいが、言っている事は的外れというか……ズレまつくっていた。

この状況での質問がそれか。

フリーは苦い笑みを隠せなかった。

さらに言うのも忍びないが『精霊焼き』は焼き菓子などではない。確か城下町の安物粉モノ料理の名前で、名前ぐらい豪華にしようという理由でつけられた名前だったはずだが……。

「分かった分かった。お城に帰るまで一度食べさせてやるよ」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

小さく笑うと、フリーはエリスの頭に手を置いた。

雰囲気は真逆だが、フリーにはエリスぐらいの妹が一人いる。小さい頃は、彼の後ろを子犬のように付いて来たものだった。

とある事情で、同居していない妹とエリスを重ねて頭を撫でてやる。

すると

「あ、あれー？　ち、力が抜ける」

エリスは目を回してフリーの体にもたれかかって来た。

「お、おい、どうした？」

肩を掴んで揺さぶってみた。

首が激しく前後するだけで目を覚ます気配はない。

「ちよつとアンタ！　何したのよ！」

「お、俺は何もしていないぞ。ただ頭を撫でただけで……」

「現に気絶してるじゃない！　可愛そうに。無能に触られたのが相当堪えたみたいね！」

アーチャーがフリーからエリスをひったくった。

エリスを抱きしめて、フリーを親の敵かのような視線で見据えている。

もしくは変質者に向けられるそれだ。実際、彼が触れてエリスは倒れてしまったので何も言う事ができなかった。

フリーは心の中で叫んでいた。

俺は悪くない。俺は無実だ！

「くくく……馬鹿どもめ……」

鉢巻男が頭を上げていた。

「早く逃げればいいものを……！　俺たちの勝ちだ！」

片目で勝ち誇る鉢巻男。

その声に応じるかのように地響きが聞こえた。

音と共に地面が僅かに揺れるのを感じる。地響きはフリーたちに向かつて来ていた。

やがて納屋の奥から人影が現れた。

巨大な人影だ。

エレメンタルギア

「精霊機……こんなもの何処で？」

フリーたちの眼前に精霊機が姿を見せていた。

エレメンタルギア
精霊機とは精霊石を用いた現代最強の武器である。

精霊機の外見は総じて全身鎧を纏った騎士のような風貌をしている。

良質の精霊石を核として金属の巨大な鎧を動かし、巨体から繰り出されるその一撃は相手を虐殺するためには十分すぎ、戦闘において一瞬でパワーバランスを覆してしまう程の最強の兵器だった。

余談だが操縦者は胸部装甲内に乗り込み操作する。

その強靱な装甲は戦闘魔道具の魔法も弾いてしまい、ひとたび武器を持てば歩兵など一撃で蹴散らす能力を持っている。

精霊機に対抗できるのは精霊機だけと言われ、かつての戦争で多用され多くの人命を奪い、猛威を振るった代物だった。

長身なフリーのゆうに3倍はあろうかと言う鋼の巨体が見下ろしている。

「ひ・み・つ、ダアアアア！ 弟分、殺れ！ 俺の仇を取れえええい！」

『あ、兄貴？ 兄貴…… あ、兄貴イイイツ！』

絶叫と共に再び気絶した鉢巻男に、精霊機から弟分の悲痛な声が響き渡らせていた。

弟分の乗る精霊機は無手だが、騎士団が使っているモノと同じ配色を施されている。

「騎士団の精霊機、ハルシオンか…… まずいな。流石に、あれに殴られると死ねるな」

「それより入手経路はどうなっているのかしら？ そちらの方が問題ね」

『兄貴。俺、殺ります！ 殺ってみせます！』

フリーたちの会話を無視して一人で弟分は猛っていた。

鉢巻男が近くにいることも忘れて精霊機 ハルシオンで地団駄

を踏む。

一踏みごとに納屋の地面が窪み、深々と巨大な足跡が残されていた。鋼鉄の鎧だろうと粉々に粉碎しそうな威力だ。

弟分の乗ったハルシオンがフリーたち向かって来て、

『死いいねえええ！』

巨大な足を持ち上げた。

どうやら踏み潰すつもりらしい。潰されれば即死。それは容易に想像できたがフリーたちに特に慌てた様子はなかった。

「保険かけておいて正解だったわね」

「まったくだ」

腕を組んで首を振るフリーとアーチャー。

『この野郎！ 何をのん気』

弟分の言葉そこまでだった。

轟音と金属の潰れる音と共に、ハルシオンの振り上げた足が宙を舞っていた。

鋭利な断面を残して巨大な足は納屋の壁を突き破っていく。ハルシオンの頭上には巨大で鋭利な刃物が見えていた。

槍。

それも、もの凄く巨大な槍だった。

巨大な槍の持ち主も、それに比例した巨躯を有していた。

蒼く塗装された精霊機が、巨大な槍で、弟分のハルシオンの足を刎ねたのだ。

蒼い精霊機の外見は弟分のそれを同じ。騎士団の精霊機　ハル

シオンだった。納屋の壁には大穴が空いており、蒼いハルシオンが突入して弟分に攻撃を加えたのが分かる。

「遅いぜ、ランス」

『悪かったな、つと！』

蒼いハルシオンは槍を持ち直し、体制の崩れた弟分に横に難いだ。弟分のハルシオンは腰の部分で上下に泣き別れることになる。

地鳴りを伴ってハルシオンは倒れ、弟分は沈黙した。

「まさか、精霊機が出てくるとはな」

『まったく、最近の悪党は物騒だぜ』

ランスと呼ばれた蒼いハルシオンの男が悪態をついた。

『どうやって入手したのかねえ？ 戦闘魔道具と違って騎士団が管理してるから殆ど手に入らない筈なんだがなあ』

「それはお互い様だ」

『へ、違えねえや』

ランスの駆るハルシオンが肩膝をついた。

ハルシオンの装甲の隙間から蒸気が噴出し、胸部の装甲が前方向に開いていく。

湯気が晴れ装甲が開き切るとハルシオンの胸部には青い髪の男が乗っていた。

フリーに比べて背は低い。しかし体は無駄な脂肪を絞りきり、一部の無駄もなく鍛え上げられており、貧弱そうな印象は微塵も感じさせなかった。戦う事に慣れた者の体つきだ。

ランスがフリーを見下ろしながら言った。

「用も済んだし帰るか。俺らの家へ」

「ああ。子悪党はぶんじばって」

「この子を連れてね」

フリーたちがランスに応えた。

この後、鉢巻男たちを縄で柱に拘束し、武器や有り金を取り上げた後納屋に放置した。

ついでに服も剥ぎ取り『義賊フリーランス参上』と書かれた紙を張っておいた。これで「フリーランス」の名もさらに知れ渡ることだろう。

鉢巻男たちは、エリスを城に戻した時に場所を教えて拘留してもらう予定だ。

しかし肝心のエリスは気を失ったままだった。

呼びかけても、頬つぺたを掴つても起きる気配はなかった。ちなみにアーチャーが監視していたため、フリーはエリスに近づく事もできなかった。射るような視線どころか、本当に矢を射られかねないため、フリーは大人しく遠巻きに眺めるだけにしておいた。

その様子を見て、ランスは大声を上げて笑っていた。

とにかく、フリーたちは義賊「フリーランス」のアジトへと戻り、彼女が目覚めますのを待つことにしたのだった ……

出会い 2（後書き）

精霊機は、中世の全身鎧のようなモノが巨大化して動き回っている
と思って下さい。

魔道具 ギア

戦闘魔道具 バトルギア

精霊機 エレメンタルギアと読む設定にしているのですが、漢字で
表記して毎回読みを書いた方がよいのか。それともカタカナで読み
をそのまま表記した方がいいのか。

どっちでしょう？

意見やアドバイスを貰えるとありがたいです。

感想も募集中です！

少しずつ更新していくので、今後もよろしく願いします。

フリーランス（前書き）

第2話です。楽しんでいただけたら幸いです。

フリーランス

貧民街。

「風の国」は王族・貴族が平民を支配する絶対君主制度の国家だ。貴族と呼ばれる人々はより上へと上り詰め、平民たちはさらに下へと虐げられる。この国には光と影の如き差別が根付いていた。

それは夕闇時のような不明瞭なものではなく、明らかな線引きをされていて、「貴族」と「平民」の間には深い溝ができて短くない。貴族を光としよう。

ならば平民は闇であろう。

光あれば影があるように。貴族の繁栄の裏には平民の犠牲がある。無論、国の主な労働力となっているのは平民で違いはないだろうし、平民なくして国は成り立たない。単純かつ分かりきった事実である。しかし、貴族は興味を示さない。

平民など、貴族からむしり取られるだけの存在と教え込まれて育ったからだった。

だから貴族は眼を背け続けてきた。

闇にだって、深い闇が存在することを。

貧民街。

そこに暮らす大半の者は国民権を認められず、故に定職にも就けず、その日の食事にも事欠く……そんな人たちが暮らす「風の国」の暗部。

金を得る手段を得られない。

だから悪事に手を染める者も多い。

悪党の巣窟として、貴族が見て見ぬふりをしている場所が貧民街

だった。

義賊「フリーランス」のアジトは、そんな貧民街の一角に悠然と軒を構えている。

豪華とは言えない、赤レンガを積み上げて作った建築物の中で。

「お、目を覚ましそうだぞ」

フリーは1人の少女の顔を眺めていた。

少女の名前はエリス。

城の重鎮の娘らしいが子悪党どもに誘拐され、フリーたちが救出してきた少女だ。

使い古された白い布を敷いた寢床に寝かされている。エリスは金色の可愛らしい眉毛をしかめていた。

じきに目指そうだと、フリーが目を覚ましそうな少女の柔らかそうな頬をつつこうとする。

しかし彼の手を掴む者がいた。

青い髪の小柄な青年　ランスだった。

「おいフリー。抜け駆けは許さんぞ」

小柄ながら鍛えこまれたランスの腕は太い。戦うための鍛錬で身に付いた鋼の筋肉だ。

フリーが使う武器が剣なら、ランスの得物は槍である。百戦錬磨の槍の名医。だからランス。ランサーでも良かったのだが、どこか呼び辛いと感じたフリーが命名してやった。

「フリーランス」の面々は本名ではなく、愛称で呼び合うのが通例なのだ。

無論、彼の呼び名であるフリーも本名ではなく愛称だ。本名を知らずとも、彼ら「フリーランス」の絆は本物だとフリーは断言する自信があった。

何をする気かランスが訊いてきた。

「もちろん、この子を起こすのさ」

フリーの言葉にランスが返す。

「ちつつち、だから言っただろう。抜け駆けは許さねえぞ。美少女を起こすのは俺の仕事だぜ」

「何を言う？ この子を助けたのは俺だぞ。起こす権利が俺にあるのは至極当然のことだ」

「飼葉に頭から突っ込んでただけの分際で、よく言うぜ」
「くっ……」

痛いところを突いてくれる。油断していなければ、あんな子悪党なぞものの数秒で始末できたのだ。俺の見せ場を奪ったのはお前らなんだぞ？

心で愚痴を入れるフリーに、ランスは真剣な眼差しを向けていた。男には譲れないモノがある。

それが今だ！ 強い眼光がそう語っていた。

「だからこの子を起こすのは俺の権利だと言ってもいいはずだ。俺が精霊機で待機していなかったら、お前らは今頃墓石の下だぜ」

「精霊機に乗っていた位でいい気になるなよ？」

精霊機は「精霊石」を利用した最強の武装だ。

フリーの3倍はあろうかという背丈の巨大な鎧に乗っていれば、人間などクモの子を散らすように蹴散らせる。精霊機で出待ちしていた？ 大人が子どもを倒しても自慢になんてならない。

男なら生身で来るのだなと、精霊機に乗れないフリーは心中で毒づいていた。

「負け犬の遠吠えは聞こえないぜ。待つてね、エリスちゃん。今、王子様があつゝいベーゼで目を覚まさせてあげるからね」

「やめろ。汚れる」

「なんだと？」

「俺の指先がその子の柔らかな頬を求めているのだ。お前の乾燥してひび割れた上に、やや臭い口で汚されてたまるか」

「安心しろ。俺が奪うのは唇だけだ」

「その方が問題よッ！」

背後からアーチャーの怒声が聞こえてきた。

間髪居れずに頭上から拳骨が降ってきた。アーチャーが女だからって鍛えられた拳は痛い。痛いものは痛い。

フリーは目から火花が飛び出そうな衝撃に。

『痛いじゃないか？』

抗議する声がランスと重なっていた。互いの声に顔を見合わせてしまう。

「はぁ……アンタたち、どんだけ仲がいいのよ」

アーチャーが呆れていた。

「失礼な。俺とランスが仲が良いだと？ コイツは俺のぶにぶに頬つぺたを奪おうとした男だぞ？」

「そうだぜ、アーチャー。お前はまだ寝ぼけてるのか？ 下で顔を洗ってきな」

「あーはいはい。じゃあ、お言葉に甘えてそうさせてもらっわね。ただし」

アーチャーがフリーたちの背後を指差した。

「アンタたちがその子を食卓に連れてきてね」

フリーが振り返ると、横になっていたはずのエリスが起き上がった。まだ眠たげな瞳でフリーたちを見つめている。

ああ、何ということだろう……フリーは天を仰がずにはいられない気分に見まわっていた。

「あの……ここは何処なのですか？ 見知らぬ天井……私はまたユニカイされてしまったのです」

「それは良かったわね、お譲ちゃん。とりあえず、貞操の危機は脱したわよ」

「はぁ、それはとても大変でしたね」

エリスが首を捻った。

色々と理解できていなさそうに見えた。理解されない方がいいのだが、とフリーは胸をなでおろし、ランスはあからさまに舌打ちをしている。

二人を尻目に足早に寢室を後にするアーチャーの背中に、二人のため息が合わさった。

「頬っぺた……」「唇……」

「ほえ？」

間の抜けた声を漏らすをエリスを、肩を落としたフリーたちは食卓へと案内する。

フリーランス（後書き）

平行して執筆している2次小説の方が1話1話長いので、こちらは1話1話は短めにしようかと思えます。

感想や批評をいただけると励みになります！

フリーランス2（前書き）

最初は主人公以外のキャラの視点。
途中から主人公の視点です。

フリーランス2

「風の国」の城砦は城下町を見下ろせる高台の上にある。

国王の住む城を頂点にその脇に貴族街が存在し、城下町は見渡すばかりに眼下に広がっている。城下町で生きる平民にとって、城と貴族街に住むものはまさに天上人だった。いつか手柄を立てて貴族の仲間入りを夢見る若者も多いが、その殆どが叶わぬまま散っていくのが現実だ……。

アイリーン・B・シルバも、平民が羨む貴族の一人だった。

「まだ見つかりませんか？」

美しい銀髪を頭の両側で束ねている。まだ幼さの残る可愛らしい顔を曇らせて、乱暴に近くにあった机を叩いていた。

束ねた髪が尻尾のように揺れる。気の強そうな銀色の瞳をした美少女だ。

「衛兵が見かけたのだから、そう遠くには行っていないせんわ。城下町の何処かに潜んでいるはずなのです！」

「はっ、申し訳ありません！ 全力で搜索を続けております！」

親しい者からはアイとの愛称で呼ばれる彼女は苛立たしげに訊いていた。

相手は城下町の見回りを仕事とする衛兵だった。

彼女は高台にある国の頂点、「風の国」の城の一室で衛兵を問い詰めている。

「分かっていますの？ 誘拐されたのは城の重鎮の娘ですよ」

「はっ、申し訳ありません！」

衛兵は直立不動で答えた。

「精霊石と魔道具の研究は国の威信をかけて行われています。その研究の第一人者の娘をむざむざ誘拐されるなんて……」

「はっ、申し訳ありません！」

「他国の手の者の仕業としたら大変ですわ。まさに国の一大事……
ああ、わたくしの騎士団としての初仕事ですのに……憂鬱ですわ」

「はっ、申し訳ありません！」

繰り返される衛兵の返事にアイリンは眉がつりあがる。

騎士団は、「風の国」を守るために設立された国家直属の少数精鋭の部隊だ。

構成員はほぼ貴族出身の武者たち。

貴族出身の、鍛錬を重ねた才能のある者の中から、ほんの一握りだけが所属する事を許される。騎士団に入るということは貴族に上つてこの上ない名誉なのだ。

家の力に物を言わせて騎士団入りしてくる者もいたが、アイリンは努力を続けて騎士団入りを果たした有望株だった。

歳にしてわずか16歳。

異例の速さでの騎士団入りだ。

アイリンは自分が騎士団にいることに誇りを持っており、初めて任された仕事が思惑通りに行かない事が気に食わなかった。

「何故見つけられないのです。貴方たちの目は節穴ですか！ 役立たずはこの場で斬り捨ててさしあげますわ！」

「まあ落ち着きなさい、アイリーン殿」

「ジャクソン分隊長！」

恰幅の良い中年男性がアイリンをなだめていた。

ジャクソン・V・リース卿。アイリンの所属する騎士団第七分隊の分隊長だ。

「衛兵を責めても仕方ないですよ。これはアイリーン殿にとっての初仕事。気負うなどは言わない。しかし今は待つ時ですよ」

「分隊長の言うとおりだ、アイリーン」

第七分隊の青年、ベン・C・レーションが言った。かなり体が大きい。

「闇雲に動き回ってもしようがないだろう？ 搜索は衛兵の仕事。」

奪還俺たち騎士団の仕事。騎士だって何でもかんでも1人で解決できるわけじゃないんだ。協力していこうぜ？」

「ベン……そうすわね。私、どうかしてましたわ」

「そうそう。居場所さえ知れば、汚らしい平民なんて俺たちの手でイチコだぜ」

ベンは剣の手入れをしながらアイリーンに笑いかけていた。

ベンもジャクソン分隊長も騎士団に入って経験を積んだ猛者で、当然、2人とも貴族の出身だった。アイリーンにとっては先輩に当たる。落ち着いた佇まいは貫禄と言ってもいいものだろう。

焦りは何も生まない。アイリーンだって分かっている。

（こんな時にお兄様がいてくれたら……）

弱気だ。自分は弱気になっている。

アイリーンは顔をはたいて気合を入れた。それを見たベンが口笛を鳴らしていた。

（手柄を立てるのよ、アイ。手柄を立てて、そしてお兄様を……！）

2年前に立てた誓いを思い出した。

誓いを胸に努力し、ようやく騎士団に入ったのだ。

初手から仕損じる訳にはいかなかった。

「伝令！」

衛兵が息を荒げて飛び込んできた。

「エリス様は田園地帯の納屋に捕らわれている模様です！」

「分かりましたわ。さあ、行きますわよ！」

アイリーンは愛用の剣を手にとった。

豪華な装飾が施された剣には赤い色の宝石がはめ込まれていた。

「風の国」では珍しい「火の精霊石」を装備したバトルギアだ。

「さーて、悪党退治といきますか？」

「うむ。事のついでに、武門の名家『シルバ家』ご令嬢の実力も拝見するしようぞ」

ベンは大剣、ジャクソン分隊長は巨大な戦斧を肩に担いだ。両方とも風の精霊石がはめ込まれている。

ジャクソン率いる騎士団第七分隊が、国の有数魔道具研究家の娘エリスの救出に出発した。

エリスがフリーたちによって助け出された、実に十分程前の出来事であった。

フリーは目を覚ましたエリスを食卓へと案内した。

義賊「フリーランス」のアジトは赤レンガで造られた二階建ての建物で、一階部分にフリーたちが食事をする空間はあった。

変哲もない大きな机に、椅子が5つ。

机の上には四角い板状のギア（魔道具）が置かれており、その上に形状の同じ鉄板がしかれている。

「どうぞ、お嬢さん」

「ありがとうございます」

フリーが椅子を引いてエリスを促すと、彼女は慣れた風に腰をかけた。フリーもランスも自分の椅子に座る。

「ここで、何かするのですか？」

「飯だよ、飯。エリスちゃんも腹が減っただろう？」

ランスが答えた。

「うちのシェフは貧乏料理しか作らんが腕は立つぜ」

「貧乏料理で悪かったわね」

小さな厨房からアーチャーが大きな容器に入ったモノを持ってくる。

彼女は机にそれと取り皿を並べた。容器の中には白くてドロドロした液体が入っていた。液体の中には刻まれた肉や野菜が入っている。

「これはなんですか？」

エリスが興味を示した。

「これがエリスお嬢様がご所望の『精霊焼き』でございます」

「まあフリーさん。嘘はいけないのです。『精霊焼き』はそれは美味な焼き菓子なのですよ？ これは全く焼けていないのです」

「それはこうするんだよ」

フリーは得意面に机の中央置かれたギアに手を伸ばす。

ギアを作動させるためのヒネリに触れそうになったその時、フリーは手を止めた。

「悪い。アーチャー、作動させてくれ」

「はいはい。相変わらず無能ね」

「そう言うなよ」

「ま、アンタの場合は仕方ないけど」

アーチャーがヒネリを回すと、ギアからジジジツと音がし始めた。ギアに装着された風の精霊石が光っている。魔力を放出している証拠だった。どうやらこのギアは精霊石から発せられた電撃を、熱に変えて鉄板を熱するモノのようだ。

鉄板に油を引いて、白い液体をアーチャーが流し込んだ。

油と液体が反発して跳ねながら、徐々に液体は固体へと姿を変えて美味しそうな匂いが食卓に広がっていく。

「とても美味しそうです」

「だろう？」

得意気にフリーが鼻を鳴らす。

「城の高級料理もいいたろうが、平民の貧乏料理も捨てたもんじゃないんだぞ」

「アンタが言うな、アンタが」

「ふん、自慢じゃないが俺は料理はできん」

「わはは、俺もだぜ！」

呆れるアーチャーにフリーとランスがいけしゃあしゃあと答えていた。

「駄目男ども……」とため息をつくアーチャーは、片面が焼きあがった料理をひっくり返した。まだ柔らかい反対側を鉄板が焼いて

いく。

「ほえ、コレが『精霊焼き』ですか？」

「そうよ。たぶんエリスちゃんが言っていたのは貴族が間違っただけの料理よ。焼き菓子じゃないわ」

「そうですか。少し残念ですけど、これはこれで美味しそうです。まだ食べられないのですか？」

「あらあら、エリスちゃんは意外と食いしん坊さんなのね」

鉄板の上の「精霊焼き」を食い入るように見るエリスを、アーチャーは微笑みながら見つめていた。

「はい。よくお父様にも『エリスはよく食べるなあ』と言われるのです」

「ほほお、食い意地のはった美少女か……それはそれで」

「食が細いよりは、沢山食べる女の子の方が俺は気持ちよくて好きだぜ！ わはは」

フリーは顎に手を当て、ランスは大声で笑っていた。完全にエリスを愛玩動物のように愛でて楽しんでいる。いい玩具ができた程度には思っているだろう。

無論、エリスは気づかない。

「でも大丈夫なのです。知っていますか？ 聖騎士アーヴァインもよく食べる方だったらしいのです。だから私も食べても大丈夫です」
「変な理屈だな。では、俺も食べても大丈夫だな」

「俺も俺も」

フリーとランスが同意する。

「まあ、お二人ともアーヴァインの事を信奉しているのですね？」
「いいや、全然」

大声で笑い出すフリーとランス。

「エリスちゃんをからかうのは止めなさい。はい、『精霊焼き』できたわよエリスちゃん。沢山、食べてね」

アーチャーはエリスの頭を撫でながら「精霊焼き」を切り分けて、

取り皿に運ぶ。彼女は彼女でエリスを愛でて楽しんでいるように見えた。

「精霊焼き」は生地に味が付いているのでソースなどはつけない。一口に運んだエリスは顔を綻ばせていた。

「とても美味しいです。アーチャーさんは立派な料理人ですね。私が保証します！」

「ありがとうエリスちゃん」

やはり満面の笑みでエリスの頭を撫で続けるアーチャーを見て、彼女には妹でもいたのかもしれない。そう、フリーは思った。

自分がエリスに妹を重ねて見ているように、彼女も誰かを重ねているのかもしれないと。

各々が自由に焼きあがった『精霊焼き』を食べ始める。

小さく一口ずつ食べるエリス。豪快に一気に口に含むランス。あまり食べずに「精霊焼き」を切り分けているアーチャー。

しかしフリーの取り皿は空だった。

完食してはいない。ギアの上の鉄板から「精霊焼き」を取れていないだけだ。

「おいアーチャー。俺にも取ってくれ」

「あー、はいはい。本当に無能ね、アンタ」

「気にするなフリー！ お前が無能でも、俺たちは見捨てたりしないぜ！」

口の中をい一杯にして、ランスが笑顔を向けてきた。

輝いている。ステキな笑みだった。フリーの額に血管が浮き出る。

「実に爽やかな笑顔だ。かつてこれ程癪に障るモノがあっただろうか？ 否、ない。あろうはずがない」

「怒らないでよ。アンタがギアに触れないことは皆承知してるんだから」

アーチャーが「精霊焼き」を一欠けら取り皿に取ってフリーに寄せた。

一口、よく味わって食べる。

「うむ、旨い。アーチャーは良いお嫁さんになれるな」

「ほ、褒めたって何にも出ないんだからね」

アーチャーは頬を染めてそっぽを向いてしまった。

何も出ないと言っていた割には、冷たい水を注いでフリーにさり気なく差し出してくる。変な奴だと、フリーは首をかしげながら水を飲んだ。

まだ彼女の顔は真っ赤だった。アーチャーは意外に初心で男の裸が苦手だったり、褒めると照れてしまう。

もっとカラかって遊ぼう。

「もしかして、フリーさんはギアが使えないんですか？」

フリーの悪戯な思惑を砕いたのはエリスの質問だった。

「あと助けてくれた時にも思っただんですけど、フリーさんバトルギアの魔法を弾いて……いたんでしょうか？ ギアを使えない事と関係するのでしょうか？ とにかく、フリーさんはなんだか変です。普通じゃないです」

「変……か」

フリーは食事の手を止めた。

ランスもアーチャーも開かない。途端に重くなった空気をエリスも感じた。

「ごめんなさいです。誰にでも聞かれない事ぐらありますよね……」

「いいさ、慣れてる」

「でも……」

「いいって。俺も別に気にしじゃない。なんなら話してやってもいいくらいだ」

フリーは軽く微笑んで見せた。

彼は本当に気にしていなかった。

普通じゃない。彼が戦った様を知る者なら誰でも口する言葉だった。エリスが初めてというわけではなかったし、「フリーランス」の仲間にも散々言われてきた事だ。

フリーは「フリーランス」の仲間たちに無能呼ばわりされている。その理由はただ一つ。

彼がギアを使えないから。ギアは誰でも使え、日常生活にも根付いている。しかしフリーはギアを使えなかった。

それは何故か？ エリスは知る由もない。

「教えてください」

エリスの表情は真剣だった。

「私のお父様はギアの研究者です。もしかしたら、フリーさんの力になれるかもしれません」

エリスは国の重鎮の娘だ。

だからフリーたちは彼女を謝礼金目的で助けた。元々興味は薄かったため、フリーたちは彼女の身の上を初めて知った。

「風の国」の周りには巨大な3つの国が存在する。

火の精霊石の産出量が多い「火の国」。

同様に水の精霊石が多い「水の国」と土の精霊石が多い「土の国」だ。

これらの国は「風の国」と合わせて四大国と呼ばれている。

今は互いに休戦し交易もしている間柄だが、いつも相手を出し抜ける時を虎視眈々と狙っているはずだ。それは「風の国」も同様で……。

そのために、他国よりも強力なバトルギアや精霊機の開発は必須となってくる。ゆえに有能なギアの研究者は重要視されるのだ。

エリスは、重鎮とされる程の、ギアの研究者の娘ということになる。

彼女が言えば、提案は現実味を帯びてくる。

フリーは彼女の目を見た。彼女の瞳に同情の色は見えなかった。純粋な善意からエリスは彼に言ったのだろう。

「エリス……君は本当にいい子だな」

彼女になら話してもいいかもな……そう思えた。

フリーは、「フリーランス」の仲間以外知らない秘密をエリスに語り始める。

それは彼の奇妙な体質についてだった

……

フリーランス 3

騎士団第7分隊は田園地区の納屋を探索していた。

「何てさまですの……」

アイリーンはある納屋を見て、口惜しそうに呟いた。

「一足遅かったようすね」

「そのようすな」

ジャクソン分隊長が応えていた。

納屋の古い木製の壁には大穴が開き、中には何者かに両断された精霊機が横たわっている。騎士団が管理している主力精霊機ハルシオンだった。柱には生まれたままの姿にされた誘拐犯と思われる男たちがくくりつけられている。

出発前に確認したエリス嬢の姿は見あたらない。

鉢巻だけは残されたままの男の胸に紙が貼られていた。

『義賊 フリーランス参上』

フリーランス……アイリーンには覚えの無い名前だった。

フリーランスがエリスをさらった子悪党を叩きのめし、彼女を連れ去った……しかも入手方法も撃退方法も不明だが、騎士団のハルシオンを撃破してだ。

ハルシオンは鋭利な刃物で斬り捨てられていた。

一撃だ。

犯人は相当の手だれだろう。アイリーンにも容易に想像できた。

「フリーランス……あの噂になっている賊か？」

「ベン、知っていますの？」

「ああ。ま、人並みにだけだな」

アイリーンの同僚のベンは、鉢巻男から紙を剥ぎ取ると彼の頬を殴った。

拳に装着されたガントレットが、鉢巻男の骨と共に鈍いを音を響かせる。鉢巻男が気づいた。

荒い息遣いで鉢巻男はベンのことを見ている。

「おい汚物。こいつらは何処に行った？」

「……………」

「答える。答え次第では減刑してやってもいいぞ」

「……………知るか」

鉢巻男は忌々しそうに吐き捨てた。

「知つても教えてやんねえよ……………テメエら、クソ貴族にはな」

「ふん、ゴミが」

直後、ベンの鉄拳が鉢巻男の顔面に叩き込まれた。

鼻を砕かれ血を滴らせながら鉢巻男の体から力が抜ける。

「衛兵。連行しなさい！」

「はっ！」

アイリーンが同行させていた衛兵に指示する。誘拐犯たちは柱から開放され、衛兵に連れて行かれた。

「さて、エリス嬢は何処に連れて行かれたのでしょうか？」

「おそらく貧民街だろうぜ」

ジャクソン分隊長の問いにベンが答えた。

「フリーランスの根城は貧民街にあると聞いたことがある」

「い、嫌ですわ。そのような汚らしい所にわたくしは行きたくありません！」

アイリーンが声を荒げる。

「貧民街は人の住む所ではありませんわ。国民権もない下賤の者が住む場所ですよ。わたくしたち貴族が近づいてよい場所ではございませんわ！」

「その通り。ですから、潜伏するには好都合ということですか」
ジャクソン分隊長うなづいた。

確かにその通りだと、アイリーンも感じる。

貧民街は悪の巣窟だ。言うなれば、駆除し続けても消えることのない害虫の根城。だからアイリーンたち貴族は見て見ぬ振りをしてきた。

臭いものには蓋をしておきたい。

悪臭のする場所に近づきたい人間などいないだろう。アイリーンも同様であった。

だがエリスの救出は第7分隊に与えられた仕事だ。

「是非もなし、ですか」

「うむ」

「手がかりはない。手分けして探すしかないか」

第7分隊は貧民街に向かい、手分けしてエリスを探索することになった。

風の精霊石の微細な空気振動を利用した「通信用ギア」を片手に、アイリーンたちは貧民街に向かう。

（見ててください、お兄様！ アイはお兄様の分まで立派に働いてみせますわ！）

騎士団が来る事を、フリーたちはまだ知らない。

「言うより見せる方が早いだろう？」

アジトの食卓にてフリーは呟いていた。

同じ机をランスとアーチャー、そしてエリスが囲んでいる。机の上には鉄板を加熱するためのギアが一つと、香ばしい香りを漂わせる精霊焼きがある。

フリーは自分の秘密をエリスに話そうとしていた。

フリーランスの仲間以外に知る者がいない秘密を説明するため、

鉄板のギアに手を伸ばす。

「ちょっと待ちなさいよ」

だがアーチャーに阻まれた。

「この無能、アタシの調理道具に触るな。今までに何回ギアをおしやかにしたと思ってんのよ？」

「う……」

「やるのならコッチにしなさい」

アーチャーが食卓にあった棚から手の平台のギアを取り出した。小さなクス精霊石が取り付けられている。色は赤、炎の精霊石だ。アーチャーがギアを作動させると小さい炎がささやかについた。

「あ、それなら私も知っています。着火用のギアですよ。お城でも煙草を吸う人が良く使っているのを見ます」

エリスの答えにアーチャーが頷く。

「そうよ。火をつけるのに便利だし、何より安いわ。秘密を見せるにしても、高い調理器具で試すよりこっちでやってくんじゃないかしら？　ねえ、フリー？」

「うっ、す、すまん」

反射的に謝罪するフリー。アーチャーの赤い瞳に怒りの炎が灯っているような気がして、反射的に謝ってしまった。別に彼女が怖いわけではない。断じて、ない、とフリーは心の中で断言する。

アーチャーが着火用ギアを投げて寄こした。

ギアを受け取ると、フリーはギアを作動させて見せた。炎は上がらない。何度繰り返ししてもギアは作動しなかった。

「あらら、本当にギアが使えないんですね。何故でしょう？」

ギアは精霊石から抽出した魔力を様々な力に変換するためのモノだ。

魔力は大気中に充満している。しかしそれを凝縮させて扱う事は大抵の人間にはできない。だがギアを使えば、精霊石に凝縮された魔力からギアを通じて魔法を発動させる事が出来るのだ。

誰でも使える。それがギアだ。だから日常生活にもギアは溶け込んでいる。

しかしフリーの持つ着火ギアは作動しなかった。

「何故でしょう？　とても興味深いです。面白いです。フリーさんはとても面白いです」

「……そりゃどうも」

エリスは好奇心に流されるままフリーを上から下まで凝視し始め

た。

ま、普通はこうなるわな。ギアが使えない人間なんて前代未聞だから、見世物みたいになるのではないかと思っていた。

フリーの口から深いため息が漏れ、

「そうだ、フリーさんを解剖してみましよう」

「あのさ、さらりと怖い事言うの止めてくんない……エリスちゃん、そんな子だったのか？」

「もちろん、冗談ですよ？」

小首をかしげて見せるエリスの可愛い笑顔に身の危険を覚えていた。

食事中のエリスの笑顔は天真爛漫だったが、先ほどのどこか張り付けたような印象をフリーは受けた。案外……本気で言っているのかもしれない。

気をつけよう。

こんな感想を抱く自分に呆れながら、フリーは着火ギアをエリスに投げた。

エリスは手で受け止めようとしたが落としてしまう。机から着火ギアを拾い上げた。

「なんですか？」

「動かしてみな」

「ほえ？」

「火をつけてみな。そのギアを使ってさ」

エリスは戸惑っていた。フリーの言っていることが理解できない様子だ。

だが言われるままに着火ギアを作動させた。

火は……出ない。

「あ、あれ？」

エリスが何回かギアを作動させるも、火は出なかった。

「おかしいです。ギアの回路が壊れた感じはどこにもないのに……」

「わはは、そりゃそうだろ！」

その様子を見ていたランスが笑っていた。

「フリーが駄目にしたのはギアの方じゃねえ。精霊石の方さ」

「俺の台詞を取るな、ランス」

フリーが口をはさんだ。

「俺はどうにも特異体質でな。小さい頃から俺の体に触れると、精霊石が駄目になっちまうんだ」

「でも精霊石は魔力の結晶体です。触れただけで使い物にならなくなるはずがありません」

エリスの言う事も最もだ。

ギアの発展と共に、精霊石はギアの動力源としてしか見られなくなった。しかし元々は精霊が内包していた魔力が結晶化したモノだと言われている。

どんなクズ精霊石でも、子どもが大人になる程度の時間では魔力が枯渴することは、絶対にない。

「最近になって分かった事なんだが……」

フリーが掌を見ながら言った。

「俺の体は精霊石を駄目にしているじゃなくて、魔力をどうにかしてしまふようなんだ。魔力を消滅させる、吸収する、拡散させる……正確には分からないけど、俺の体に魔力は役に立たない」

「では、そのためにギアが使えないのですね？」

「まあな。お陰でえらい不便な思いをしているよ。重宝するのは、戦いでの防御ぐらいで、バトルギアも使えないしな……やれやれ、面倒な体だよ」

フリーはこの日一番大きなため息をついていた。

「ホント、こっちはいい迷惑よね。今までに何個ギアを駄目にされた事やら。ねえ、フリー？」

アーチャーが意地悪な笑みを浮かべる。

フリーは面倒くさそうに苦笑を浮かべていた。

「ア、アタシがいないとアンタはホントに何にもできないんだから！ 少し感謝しなさいよね！」

「どうもありがとうございましたこのご恩は一生忘れませんアーチャー様」

「凄く棒読みね！」

心なしかアーチャーの口元は嬉しそうに緩んでいた。

「おい、顔、赤いぞ？」

「う、うつさいわね！ 精霊焼きとつてあげないわよ！ エリスちゃん、残りの精霊焼き全部あげるわ。しっかり食べてね？」

精霊焼きが切り分けられ、空だったエリスの小皿に積まれていく。フリーの取り皿は空のままだ。

「勘弁してくれ。飢え死になんて死に方は嫌だぞ。面倒臭そうだからな」

「可哀想なフリーさん。私の分を分けてあげるのです」

「すまねえな、エリスちゃん！」

ひよい、ぱく。ランスに横から精霊焼きを掠め取られた。

「旨し！」

「てめえええええ！ 吐け、吐き出せ、俺の飯を返せ！」

フリーは絶叫した。ランスの肩を掴んで揺するも帰ってきたのは大きなゲップだけだった。

フリーの端正な眉がつりあがる。

フリーは食器を置くと席から立ち上がり、部屋の隅の剣の鞘を取った。柄に手をかけてると、眼光が獣のように鋭くなる。

「……決闘だ！」

食卓の場でフリーは剣を抜き放った。

許すまじ！ 食べ物の恨みは深い…… 食べ物の恨みを思い知れ！ 切れ味鋭い銀色の長剣は、中ごろから先がキレイに無くなっていった…… 鉢巻男の魔法で切り落とされたのをフリーは忘れていた……。

「ケットー？ 何ですかそれは？ 美味しいのですか？」

「エリスちゃん、見ちゃいけません。あれがカッコ悪い大人というものよ。エリスちゃんはあるな風になっちゃ駄目からね？」

「はい、肝に銘じておきますです」

「アーチャー、それより新しい精霊焼き焼いてくれよ！」

「分かったわよ。食い意地の張った団長さんね」

「……分かった。お願いだ、俺を無視しないでくれ」

剣を納めたフリーが泣きそうになりながら席に戻る。

この後、フリーはアーチャーが新しく焼いた精霊焼きに舌鼓を打ち、機嫌はすっかり良くなったのだった……。

フリーたちは、騎士団が貧民街に向かっていているのを、まだ知らない……

フリーランス 4

この「世界」は楕円形をしている。

天上から見下ろした時、確かにそのような形をしていた。

地図に書くとは理解しやすくなる。川原に転がっている水切りに丁度良い形の石のような楕円形。

4 大国によって、楕円形の「世界」を東西南北で4等分されていた。

「風の国」は東に位置する。4 大国の再開めが交錯する国境から、山や川、森など自然溢れる平野をさらに東に行くと「風の国」の城下町が見えてくる。

この国の町は城砦を頂として山のような形に広がっている。

高貴な者は上へ、そうでない者は下へ。

完全なる縦社会……それが「風の国」である。

貧民街は「風の国」で最も低い位置にある街だった。

田園地帯のある地表よりも低い。元々ではなく、過去の地震による地盤沈下で沈んだ街だ。地表より2 m程低い街は風雨の影響を必ず受け、生活環境は城下町で最悪だった。

「風の国」は縦社会。高貴な者は上へ、下賤な者は下へ。

その意識は民の底に根付いており、最も低いその場所は自然と貧民街と呼ばれるようになり、近づく者は少ない……

貴族、アイリーン・B・シルバは貧民街に足を踏み入れていた。

「何故、わたくしがこの様な所に来なければいけないのかしら……？」

滑らかな布で口元を押さえブックサ言いながら歩を進める。

銀髪を二つに纏めたアイリーンは胸を守るチェストプレートにガントレットを身につけ、赤いマントを翻しスチールブーツでひび割れたレンガの道を歩いていた。腰には小ぶりな一振りの長剣。その柄には赤い精霊石と、「風の国」の平原において最強の動物と噂される「レオー」を模した紋章が刻まれていた。

貧民街に人影は少ないが、アイリーンは視線を感じていた。

「あちこちから見られてますわね」

アイリーンは鼻を鳴らして視線を確かめる。

暗い路地裏や人が住めそうにないレンガの建物から見られているのを感じる。

赤いマントは騎士だけが着用を許される。大方、アイリーンを騎士として隠れているのだろう。

「土地が低いせいか空気が淀んでますわ。それに少し臭い。早くエリス嬢を助けて、城で湯浴みでもしたいところですよ」

現在、フリーランスの手がかりを見つけるために、ジャクソン分隊長とベンとは別れて行動している。敵の根城を発見する時間を短縮するためだ。

発見でき次第、通信用ギアで集合をかける手はずになっている。

（アイ、ここは我慢ですね。お兄様のために、まずは手柄を立てないと……）

アイリーンは貧民街を一人進んでいく。

食事が終わり、一服したフリーたちは談笑していた。

他愛もない話ばかりだ。それなりに楽しく時間を過ごし、気づいたときには小1時間が経過していた。

フリーたちがアジトにエリスを運び込んだのは、彼女が気絶して

しまったからだ。彼女には起きて、自分たちが誘拐犯ではない事を証言してもらわないといけない。

気絶したまま城に行ったとしよう。

たちまち誘拐犯扱いされ、投獄されるだろう。

エリスに食事を振舞ったのも敵ではないことをアピールする意味もあつた。食事は終わり、彼女はすっかり元気を取り戻して笑っている。

当初の目的を果たすときが来た。

「さてと、行くとしますか」

「？ 何処へですか？」

椅子を立つフリーにエリスが疑問を口する。

「もちろん、君を家まで送り届けるのさ。一人じゃ帰れないだろう？」

「いいえ。お城は城下町の何処からでも見えるので、きつと一人で帰れるのです」

「ま、そう言わずにさ。俺たちを助けると思つて、俺に君を送らせてくれ」

「でも、ご迷惑じゃありませんか？」

『全然ッ』

フリーランスの3人の声が重なつた。

フリーたちの目的はエリス奪還の報奨金だ。騎士団を動かしたにも関わらず平民に先を越されては、国も金を支払わないわけにはいかないだろう。もちろん、騎士団の面子を守るための口止め料的な意味も含めてだ。

このことは心証を悪くするためエリスには伝えてはいない。

目の前で首をかしげているこの少女が、フリーたちの裏事情を知る必要もないだろう。

フリーは愛用の黒服に剣を携えた。懷から何かを取り出す。「レオー」を模した紋章だった。貨幣の倍ほどの大きさと、細い鎖でフリーの首に吊るされている。

（衛兵に絡まれたらコレを使うか……面倒だな）

懷に紋章を仕舞った。

「フリー、くれぐれも粗相の無いようにね」

アーチャーが調理道具を片しながら言う。

「エリスちゃんが可愛いからって襲うなよ、わはは！」

ランスが茶化してきた。

保護対象に乱暴を働くはずがない。フリーは女性の好みに煩い方ではないが、エリスのように幼い雰囲気娘に手を出すつもりはなかった。

エリスは妹のようなものだ、今日限りではあるのだが。

「行こうか？」

「はい！」

エリスが元気に立ち上がった。

「皆さん、ありがとうございました！ 精霊焼き美味しかったです、ご馳走様でした！」

「またいつでも来てね。はい、コレ精霊焼きのレシピ。お城で作る事は無いと思う行けど」

アーチャーがエリスの手に紙切れを握らせる。

エリスの礼にアーチャーはこう返した。

「その時はお城のお土産も持ってきてくれると嬉しいわ」

「俺は金色のお菓子だと嬉しいぜ！」

ランスの言っているのは金貨のことだろう。

ちなみに銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚に交換できる。銀貨10枚あれば平民なら一月程度食っていける金額だ。金貨は大金である。

ランス流の冗談なのだろう。

「分かりましたです！ 金色のお菓子ですね、探しておきます！」

それをエリスがどう捉えたかは分からないが。

「行くぞ、エリス」

「はい、フリーさん」

フリーたちは貧民街へと足を踏み出した。

アジトを出ると貧民街の古びた建物が目に入ってくるが、それはフリーにとっては見慣れた光景だった。

窓が割れた家もあれば、入り口の扉がない建物もある。過去の沈下で石畳の道には亀裂が入り、割れた窓の破片や腐臭を放つゴミが散乱していて衛生的にはよろしくない。

しかしフリーにとっては見慣れた貧民街の風景だ。

「なんだか…… 凄いですね」

エリスは初めて見る貧民街に驚いていた。

「この国にこんな所があるなんて……」

「きっと、どこの国にだってあるさ」

問題を抱えていない国なんてない。そして問題や体内の毒は、いつも上ではなく下にしわ寄せとして降ってくるものだ。

フリーは貧民街で暮らしてきたから分かる。

この貧民街のような街は、決してこの世から消えてなくなる事はない。

フリーが視線を上に向けると、まるで天を突くようにそびえ立つ城砦が目に見え込んできた。目を細めている。フリーは何かを思い返しているようにも見えた。

「エリスはお城に住んでるんだっただな」

フリーはエリスに訊いた。

「はい、そうですけど、何か？」

「どうだ？ 普段見下ろしている街を実際に見てみて、エリス、君はどう思う？」

「えっ、と……」

エリスは数秒逡巡して答えた。

「良くない、と思うのです」

「良くない、というと？」

エリスの言葉をオウム返しする。

「私たちだって、この貧民街の人たちだって、同じ国の住民です。皆、同じ暮らしをするのは無理でしょうけど、最低限の生活をする権利は誰だって持っているはずですよ。でも私の周りの人たちは口を揃えて言うのです」

エリスは少し唇を強く結びフリーを横目で見た。言いにくい。そんな風に見て取れた。

しばらくして、エリスは口を開いた。

「貧民街の奴らは人間じゃない。だから関わっちゃいけないって、皆さんは言うのです」

「……そうかい」

エリスの言葉は貴族の持つ共通理念として通用するものだろう。

貴族は平民をいつも見下している。貧民街の人間は特にだ。人間扱いされていないのは薄々感じていたが、エリスの口を通じて聞かされ、フリーの実感はさらに固くなる。

エリスは上流階級の人間だ。フリーは思う。彼女も他の貴族と変わらないのかもしれないな……と。

「でもそれは、間違いだと気づきました」

エリスは言った。

「フリーさんもランスさんも、アーチャーさんも皆優しくかったです。皆、人間でした。お城の人たちの言っていることは間違っていると、私は思うのです」

「……そうか。ありがとうな、エリス」

フリーが感謝の言葉を述べたが、エリスは何故言われたのか理解していない風に見えた。

貴族が全てエリスのみたいなら良かったのにな……。平和なエリスの頭の中では貴族と平民の対立していないのだろう。彼女のような人間ばかりなら、戦争なんてきつと起きない。

……国が、それで成り立っていくかは別問題として、だ。

「さてお嬢様。私がお城までエスコートして差し上げましょう」

「お願いします。でも、私には触れないで下さいね」

手を差し出したところで、ホンの少し前のことを思い出した。

エリスはフリーは触れた途端に倒れた。理由は……分からない。フリーの特異体質が関係しているのだろうか？

また倒れられても厄介だから、今は触らない方が無難だろう。

「貧民街の出口はこっちだ。付いて来い、エリス」

「あつ、フリーさん待ってください」

エリスの前をフリーが先導した。エリスは慌てて後を追ってくる。

特に何事もなく、貧民街の出口までやって来た。

過去の地震で地盤沈下しているため、出入り口には大きなハシゴが掛けられており、住民はそれを使って出入りをしている。

ハシゴを上げれば城下町で、後は城に向かって道なりに登っていくだけで貴族街に到着できる

「やはり来たか」

大男が立っていた。

ハシゴの前に陣取り、フリーたちの進行方向を阻んでいる。銀色の軽鎧に赤いマントをなびかせている。大男は騎士だ。

フリーよりも頭一つほど長身で筋肉が盛り上がっており、背中には肩口程まである大剣を背負っている。

「なんだ、お前は？」

表情険しくフリーが聞いた。手は剣の柄に置き、エリスを庇うように体を前に出す。

大男はフリーを見下ろしながら鼻を鳴らした。

「それはこちらの台詞だ。貧民街の汚物が、我ら貴族に軽々しく話しかけるな」

「……ふん。その貴族様が貧民街に何の御用ですかね？」

「しらばつくれるなよ、この悪党が」

「悪党？」

大男の言葉にフリーは……身に覚えがありすぎた。

義賊「フリーランス」は別に「正義の味方」ではない。

フリーランスの仲間と平民の味方だ。

だから貴族から盗みを働くことだってある。だが、そのほとんどを貧民街の住民に分け与えたりしていた。そのため「フリーランス」の経済状況……要するにフリーたちの活動費用は破綻しかけだったりするのだが……。

大男は騎士だ。貴族への盗みでフリーたちを捕縛しに来たのだとしたら……問題である。

「悪党？ 何のことだ？」

何にせよ、一度ここは白を切っておこうとフリーは言った。

「俺たちはこの街で静かに暮らしているだけだ。今まで、貴族様も貧民街は無視し続けてきただろう？ このまま放っておいてくれな
いか？」

「汚物が。貴様の答えなんぞ聞いていない」

「……………」

厄介だ。

平民の訴え要求は一切聞かず、自分たちの都合だけを押し通すこの大男は典型的な貴族のようだ。最初から話し合う気がないのなら言い逃れも難しい。

「エリス嬢、お迎えに上がりました。このような場所でさぞ深い思
いをされたことでしょう」

大男はエリスには紳士的だった。

「はあ」

「さあ、城に戻りましょう」

「でもフリーさんが送ってくれると言っているのです。わざわざ探
しに来てくれてありがとうございます。皆さんで一緒にお城に帰
りましょう」

「その提案は了承しかねます」

「？ 何故なのですか？」

エリスの質問の返答を大男は行動で示した。

背負っていた大剣を抜いたのだ。子ども1人分の重量は優にありそうな鉄の塊が軽々と持ち上げられる。切れ味ではなく重量をもって相手を叩き切るための武器だ。

「その男はエリス嬢を誘拐しました。悪党の答弁は地下監獄でしてもらうことになります。もしくは此処で死んでもらう」

「おいおい、勘弁してくれ。投獄とか面倒極まりないぞ」

「そうですよ」

エリスが大男に言う。

「フリーさんは私をお家にユークイして、精霊焼きをご馳走してくれたのです。決して、悪い人ではありません！」

突如襲いかかって来た頭痛のため、フリーは頭を押さえてしまった。

大男の顔には勝ち誇った笑みが浮かべられていた。自分が正義だと信じきっている顔だ。説得は難しいだろう。

それにしても……

（天然だとは思っていたが……ここまでとは……）

酷いの一言だ。

エリスは何の意図も計算高さもないのに、一言で状況の泥沼化に成功していた。

（天然の策士？ この娘……将来、悪女になったりしないだろうな？）

エリスの将来が心配になってきたが、状況が思考の脱線を許さない。

「情状酌量の余地はなし。どうだ汚物？ 言い逃れできるか？」

大男がフリーを睨む。

「……………ああ。だが面倒だからもういい」

フリーには大男は偏見でしか人を見れない上に粗暴な男のように見えた。

この手合いは腕にモノを言わせた方が良い。

どの道、大男が退かなければ貧民街の外には出れない。

大男は懷からギアを取り出して作動させた。

「こちらベン。賊を発見、これより交戦に入る。場所は貧民街出入り口」

「面倒だな。仲間が来る前に片づけるとしよう」

「図に乗るなよ。この汚物が」

大男が馬も両断できそうな大剣を両手で構えた。大きい。間合いはフリーの長剣の軽く2倍といったところだろう。

フリーも剣の柄に手をかけた。

今、ここで捕まるわけにはいかない。エリスを城へ届けて報奨金を頂かなければ、フリーたちの生活がさらに苦しくなってしまう。

それに騎士団だろうが衛兵だろうが、今更のこのこ出てきて、彼女を連れて行かれるのは我慢ならなかった。

「俺の名前はフリーマン。義賊『フリーランス』のしがない鉄砲玉だ」

「騎士団第7分隊所属、ベン・C・レーション。貴様を地獄に送る男の名前だ。覚えておけ」

「嫌だね」

一触即発の空気が流れる。

眼光の鏢迫り合いの後、フリーは剣を鞘から抜いていた。

フリーランス 4（後書き）

現在、仕事忙しく執筆が滞っています。

次回更新まで時間がかかると思われます。

1週間後までには更新できるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

休載のお知らせ

突然ですが、この小説「精霊神機アーヴァイン」を休載させていただきます。

理由は、2次小説と並行して執筆を行っているのですが、私には2つの作品を両立させるのが難しいと感じているからです。
また最近の仕事の方が忙しく、執筆に割ける時間が少なくともなっています。

そのため、中途半端に書く位なら一度休載して、時間をおいて執筆を再開しようと考えています。

今回の休載は、完全に作者の都合によるものです。

ここまで小説を読んでくれた方々には本当に申し訳ないと思っています。

小説の方はいずれ再開する予定ですので、その際にはよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1328q/>

精霊神機アーヴァイン - A bond of eternity -

2011年2月15日21時10分発行